

## Topics I 九州

# 「みんなの家」ができるまで ー熊本県西原村の仮設住宅団地における取組

黒瀬 武史 九州大学大学院

熊本地震後に建設された仮設住宅は、東日本大震災の経験に基づき、プレハブが並ぶ仮設住宅地を、少しでも人間的な空間とするために、予め様々な工夫が行われた。建築家・伊東豊雄氏らの提案による団地毎に住民が集う場として建設された「みんなの家」もその一つである。

九州の建築系大学生・教員を中心に組織された「KASEI」は、仮設の住環境改善を中心に、居住者と自治体の継続的な支援を目的としている。原則1団地を1研究室が担当し、仮設やみんなの家を、居住者の方々が主体的に使いこなすための細やかな「加勢」を続けている。本稿では、筆者（熊本市出身）が九州大学・建築学科の菊地教授・菊地研究室と共に取り組む西原村小森第2団地の事例を紹介したい。

小森第2団地の談話スペースは、「ハコ」としては充実している。82世帯の団地に、入居当初から40平米の木造談話室が設置された。さらに地元建築家が住民WSを開催して設計した60平米の本格型みんなの家が12月に竣工する。問題は、誰が、どう使うかという部分である。

設計WSでは、「農家も多いから屋外の流し台が必要」、

「2つもあるし、片方は親戚等の宿泊も認めては?」「みんなの家もいいが、うちの集落はどうなるの?」という声も。学生にこそ、打ち明けやすい本音もあるのかもしれない。

10月末に行われた上棟式(写真)では西原村特産の薩摩芋を使った焼き芋や近隣の畑で採れた大根の配布も行われ、西原らしい、人が集まる場所の雰囲気も広がりつつある。

充実した「ハコ」の支援を、仮設住宅の暮らしの豊かさにつなげる活動は始まったばかりだが、同じ九州内という近さを活かして、じっくりと活動を続けていきたい。



8月の設計WSの様子



みんなの家の上棟式

## Report I 九州

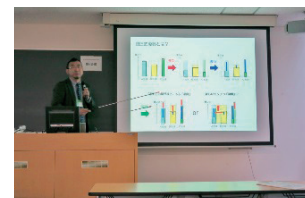
# 災害の復旧・復興と研究とのブリッジング ーワークショップ開催報告

吉城 秀治 福岡大学/日本都市計画学会九州支部幹事

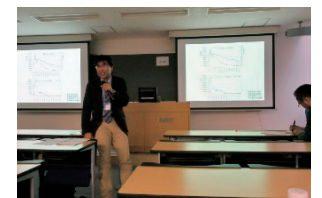
2016年4月に発生した熊本地震では、二度の強震と圧倒的な数の余震に遭遇した。これまでの災害対応、復旧・復興手法に対して新しい知見が必要とされている一方で、被災地における研究を災害の復旧・復興の現場に活かすためにはまだまだ課題が山積している状況にある。そこで九州支部では、熊本、東日本、中越の3つの地震災害の事例から、災害の復旧・復興に調査・研究を役立てるにはどうすれば良いかを、その意義や、調査・研究体制、手法等について議論し、その上で次の災害に備えるための展望を共有することを目的として、支部主催のワークショップを平成28年11月12日に開催した。

熊本地震や東日本大震災をはじめとしたこれまでの災害に携わってきた研究者から話題提供がなされ、復旧復興のあり方に関する問題提起と復興における住民協働の重要性、調査の体系化・データの共有化の必要性、復旧復興において学識がやるべきこと・やるべきでないこと、民間支援者の果たす役割と学識と住民の関係のあり方等についての報告があった。続くディスカッション同士の討論や会場から

の質疑応答においては、益城町における不要な調査がされないための取り組みや、現在の熊本における調査の状況、調査結果のフィードバックのあり方等について議論がなされた。最後に、情報や人をつなぐ仕組みを発信する場、あるいはそれらのあり方を議論する場としての学会の役割が示唆され、盛会のうちに閉会した。



田中准教授(熊本大学)



柿本教授(熊本大学)



平野准教授(東北大学)



松田准教授(長岡技術科学大学)